

男鹿のなまはげに学ぶ地域防災

跡見学園女子大学教授

鍵屋



男鹿市で コミュニティデザイン実習

秋田県男鹿市で、2016年9月19〜23日の5日間、跡見学園女子大学の学生8名と私を含む引率教員2名がコミュニティデザイン実習を行った。

男鹿市と跡見学園女子大学は、昨年12月に、地域活性化、人材育成等を目的として連携協定を締結した。なぜかというところから男鹿市の出身だからだ。完全な身びいきである。今回の実習はその一環として、男鹿市のコミュニティデザインを研究する第1歩として行われた。

初日は、男鹿市と大潟村を範囲としている自然公園「男鹿半島・大潟ジオパーク」のフィールドワークである。八郎潟を干拓してできた大潟村や寒風山を見た後で、ジオガイドの案内で7000万年前からの地層が見られる男鹿半島西海岸を中心に学んだ。人類が誕生するはるか以前から存在する岩石

や地層の話に引き込まれ、「地学って本当は面白いんだ」などの声が上がった。

男鹿真山伝承館では、毎日「なまはげ」の実演が行われる。このなまはげは、暴れて子どもたちを泣かすだけでなく、家の主と「なまはげ問答」をするのが特徴だ。主が嫁や孫を誉めると、なまはげは「なまはげ台帳」を取り出し、嫁や孫の日ごろの悪い行いを読み上げる。なまはげは何でも知っているのだ。主が取りなし、なまはげは来年も来ることを約束して帰っていく。

男鹿の魅力についての ワークショップ

翌日は、男鹿市職員の説明を聴き、若い市民、市職員、地域おこし協力隊員らと男鹿の魅力についてワークショップを行った。次の日は、地域活動、社会活動を熱心に行っている高齢者の話を伺い、さらに婦人会の皆さんから昔の地域社会や今の地域の課題、魅力などを気さくに話していただいた。

私は学生に大きな課題を与えていた。それは、1人が男鹿の魅力を100個考えることである。しかも、「美しい」「きれい」「素晴らしい」などという抽象的な形容詞を禁止し、具体的に書くよう求めた。夕食後から取りかかり、早い学生で午前1時頃まで、遅い学生は午前3時過ぎまで粘った。そして、8人全員が100の魅力を書き上げた！

しかし、それでは終わらない。まずは、2人の外部有識者から講義を受けて、さまざまなまちづくりのプロセスを学ぶ。次に、全員で800個の魅力をカテゴリー別に並び替える。そして、特に輝く言葉を、800から80個をめどに絞り込み、選んだ言葉でストーリーを作り上げる。ストーリーを伝える文章を作成し、言葉を磨く。時刻は真夜中の12時を回った。ある学生たちは、ビデオカメラでずっと動画撮影をし、早回しをした動画に音楽を載せて、メイキングビデオを作った。実に楽しく面白い。

翌日の午前はストーリーをさらにドラマ仕

Risk Management



重要無形民俗文化財にも指定されている「男鹿のナマハゲ」（跡見学園女子大学 霧理恵子教授撮影）

立てにしてPowerPointに落とししていく。「若者、よそ者、女性」の視点で、どれだけ男鹿の魅力を伝えられるか。

最終日、9月23日午後1時から、男鹿市長をはじめ市役所職員等の前で800の魅力をパネルに貼り、学生がPowerPointを使ってプレゼンをした。

このドラマのキーワードをいくつか紹介したい。男鹿の海、山、黄金色の田んぼ、と息

もつかせぬ光景を学生はこう表現した。「シャッター音が止まらない」。宿泊した旅館が出してくれたご飯、山海の美味に「4キロは太ってしまふ男鹿のメシ」。なまはげ太鼓を叩いたイケメン男子には「なまはげで泣いたあの頃。今はボクがなまはげだ」。

その後、30分間ほど、市長および市職員と熱心に質疑応答を行った。男鹿市の課題を見るのではなく、魅力を伝える調査研究が強い関心をよんだ。作成物は男鹿市に提出し、地域の魅力増進に役立てていただけははずだ。そして、この素材を大学でもさらに深く研究し、男鹿市に還元していく。私たちは、来年も、再来年もずっと男鹿に行こうと決めている。楽しみだ！

「ぜひ、うちにも来て」という自治体があれば、声を掛けていただきたい。ただし、学生の旅費にご配慮を。

なまはげ防災

さて、なまはげには別の一面もある。私も入会している地区防災計画学会では、地に足の着いた防災の一つとして「なまはげ防災」と呼んでいる。なまはげは若い男性が務めるが、学童期までの子どもがいる家の中に入っていく。すると、「おばあちゃんがだいぶ弱ったな」とか、「障がいのある兄弟がいるんだな」といった家族の様子が分かる。「なまはげ台帳」は災害時要援護者支援計画でもある。災

害時にはそのような要援護者を真っ先に救いに行くことができる。

地域の伝統行事が、図らずもコミュニティ防災の要である顔の見える関係づくりになっている。さらに、なまはげはお山の神社から降りてくるが、そのためには参道を除雪しなければならぬ。これは、津波避難路の整備につながる。

昔の人は文字の読み書きが不自由であったために、防災の教訓をこのような伝統行事に残したのではないだろうか。災害の多い地域には、必ずこのような地域の知恵があるはずだ。それを掘り起こして子どもたちに伝えることが、先人や郷土を愛する気持ちにつながるだろう。

筆者プロフィール

鍵屋 一（かぎやはじめ）

1956年秋田県男鹿市生れ。早稲田大学法学部卒業。板橋区防災課長、板橋福祉事務所長、福祉部長、危機管理担当部長（兼務）、議会事務局長等を経て2015年3月退職。京都大学博士（情報学）。2015年4月跡見学園女子大学観光コミュニティ学部教授。法政大学大学院・名古屋大学大学院兼任講師。内閣府「災害時要援護者の避難支援に関する検討会委員」など政府委員。内閣官房地域活性化伝道師、NPO法人東京いのちのポータルサイト副理事長など。著書に『図解よくわかる自治体の防災・危機管理のしくみ』『福祉施設の事業継続計画（BCP）作成ガイド』など